

第十二回 小野市詩歌文学賞

短歌部門

『ザベリオ』

おおぐちりょうこ
大口 玲子



昭和四十四年、東京都に生まれる。宮崎県在住。早稲田大学第一文学部卒。「心の花」会員。

歌集に『海量』(現代歌人協会賞)『東北』(前川佐美雄

賞)『ひたかみ』(葛原妙子賞)『トリサンナイタ』(若山牧水

賞、芸術選奨新人賞)『桜の木にのぼる人』(宮日出版文化

賞)。歌文集に『大口玲子集』『神のパズル』。

宮日芸芸選者。



受賞者のことば

小野市教育委員会から受賞の連絡をいただいたのは、私の住む宮崎市の気象台から桜の開花宣言が出された日でした。満開となった今も、世界的な規模で広がり続けるパンデミックと、それにもなってきたさまざまな問題が表面化するただ中で、上田三四二先生の短歌や文章に向き合う機会をいただいた意味を考えています。

上田先生は内科医として、また自身の大病を通して、人間の身体と命を深く見つめ続けた歌人でした。病へのおそれや必ず訪れる死を自覚しつつ、上田先生が詠んだ桜を宮崎の満開の桜に重ねるようにして見えています。選考委員の先生方、市長をはじめとする小野市の皆様、『ザベリオ』をお読みくださった皆様に心より御礼申し上げます。

『ザベリオ』十首選

永田 和宏 選

長崎駅のステンドグラス三枚のうちの二枚に教会のあり

いまだ見ぬハウステンボスいまだ子を原爆資料館に伴はず

野良猫の野良猫らしきただずまひ見守りながら足湯につかる

「8地獄共通観覧券」買ひて二つの地獄行き残したり

ロスアラモス、アラモゴードも神は見けむつねに人間とともにゐる神は

耳たぶを削がれしことなど聴きながら息子は自分の耳たぶに触る

絵本には死の苦しみが描かれぬと言ふ子の不満さいこまで聴く

聖堂の十二列目に座りたり十二列目に届く百合の香

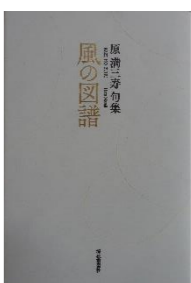
原告のわが緊張をほぐさむとスマホ開きて子の写真見す

われと違ふガイドに付きてやや先の展示に見入る子の背中見ゆ

俳句部門

『風の図譜』

はらまさきじ
原満三寿



昭和十五年、北海道に生まれる。早稲田大学第一法学部卒。金子光晴研究者。

句集に『日本塵』流体めぐり『風の象』など。俳論に

『いまだきの俳句』。詩集に『魚族の前に』『海馬村巡礼譚』

『臭人臭木』『タンの譚の舌の嘆の譚』『白骨を生きる』な

ど。

平成十三年、『評伝 金子光晴』で第二回山本健吉文学賞受賞。



受賞者のことば

このたびは、小野市詩歌文学賞を賜り、小野市の皆さんにご推薦いただきました。選考委員の先生方に深く感謝申し上げます。

小野市にはご縁があります。十年ほど前、ご当地・浄土寺の阿弥陀三尊立像を拝観し、大変感激したことがありました。ですから、受賞も仏恩かもしれません。

七十歳はじめに、にわかには俳句に専念すべしとの内心の声が湧き上がり、第二句集を出しました。そして、七十八才でこのたびの第六句集です。老年になることに、俳句という三句体が私から言葉を紡ぎ出す、その面白さがわかってまいりました。

『風の図譜』十句選

宇多 喜代子 選

水はなつ脊梁山脈に鳥かえる

指で指かぞえる指に赤トンボ

産道を逆さに出れば木下闇

さよならの手は低く振る緑の夜

行く秋をどの藁人が嚏せり

関八州まわし呑みする蝮酒

月山へ風の蛩音についてゆく

三山を月ごとながす最上川

送り火の手に手がそよぐ爆死の手

憂き世かな宇野重吉めく金魚売り

選考委員

ながた かずひろ
永田 和宏



昭和二十二年、滋賀県に生まれる。京都大学理学部を卒業。理学博士。「塔」選者(前主宰)。
歌集に『饗庭』(若山牧水賞、読売文学賞)『風位』(逍空賞、芸術選奨文部科学大臣賞)『後の日々』(斎藤茂吉短歌文学賞)など。評論・エッセイ集に『もうすぐ夏至だ』『たとへば君』『近代秀歌』など。
京都大学名誉教授。京都産業大学タンパク質動態研究所・所長を経て、現在 J T 生命誌研究館館長。平成二十九年にタンパク質研究においてハンス・ノイラト科学賞を受賞。朝日歌壇選者。宮中歌会始詠進歌選者。

短歌部門講評

大口玲子歌集『ザベリオ』

大口玲子さんは直情の人である。そして行動の人でもある。東日本大震災後の原発事故から子を守るため、東北から宮崎への移住も断行した。本歌集は、そんな著者の第六歌集。
テーマは多岐にわたるが、三つの大きな柱があり、いずれも大口さんにとっては詠わなければならない重要なものであることが読者にはよく自然に納得される。まず、少年として成長していく息子と時間を共有しつつ、息子の視線を通じて改めて社会を発見していくという喜びと驚きがある。次に、歌集名『ザベリオ』、すなわちザビエルからもわかるように、信仰の問題が正面から詠われているのも本書の大きな特色である。第三点として、沖縄問題、安保法制など社会に向ける真摯な視線がある。単に歌のテーマとしてそれらに取り組みただけではなく、安保法制違憲訴訟の原告として法廷に立つことまでやってしまうのが、いかにも大口さんである。どのテーマにも体当たりのところがあり、作者に対する信頼感をおのずから感じさせてくれるのである。

馬場 あき子



昭和三年、東京都に生まれる。日本女子専門学校(昭和女子大学)を卒業。昭和五十三年「かりん」を創刊。
歌集に『桜花伝承』(現代短歌女流賞)『葡萄唐草』(逍空賞)『阿古父』(読売文学賞)『飛種』(毎日芸術賞、斎藤茂吉短歌文学賞)『鶴かへらす』(前川佐美雄賞)など。評論に『式子内親王』『鬼の研究』『和泉式部』『日本の恋の歌』など多数。
業績により朝日賞受賞。朝日歌壇選者。日本芸術院会員。文化功労者。

小野市詩歌文学賞とは

対象 短歌・俳句において、前年中に刊行された文芸作品の中から最も優れた作品に贈る。

選考 全国の主な歌人・俳人にアンケートを行い、その結果を参考にして、選考委員が決定する。

選考委員 馬場あき子
宇多喜代子
永田和宏

授賞式 小野市うるおい交流館エクラにて、上田三四二記念「小野市短歌フォーラム」と同日開催。
正賞・副賞(百万円)

※令和二年度は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため中止

小野市詩歌文学賞受賞者

うだ きよこ
宇多 喜代子



昭和十年、山口県に生まれる。俳誌「獅林」をへて桂信子の「草苑」同人。現在は、「草樹」会員。
句集に『りらの木』『半島』『夏月集』『象』(蛇笏賞)『記憶』(詩歌文学館賞)『宇多喜代子俳句集成』など。文集に『わたしの歳事ノート』『田んぼのまわりで』『女性俳句の光と影』など。
現代俳句協会賞受賞。読売俳壇選者。日本芸術院会員。文化功労者。

俳句部門講評

原満三寿句集『風の凶譜』

季節の折々に吹く風は、時節により地域により、多くの名で呼ばれ、天地の万象に親和してきました。風がなければ、地上の生きもののいのちは断たれます。
句集『風の凶譜』は、その風の見えるところ見えないところ、近いところ遠いところ、乾いたところ湿ったところ、その来歴や行方などなど、風に沿うこの世もろもろの景に重なる自身の心象の景を、ときに荒々しくときに柔らかに表現した三九〇句で成る句集です。
行儀よく整った句、わかりやすい面白さ、約束事に忠実な句、それらとはずれたところで俳句と言葉の広がりを試行し、自らを表出した原満三寿の『風の凶譜』の句群に喝采を送り、本年度の授賞句集といたしました。

第一回受賞者 短歌 岡井 隆 『ネフスキイ』
俳句 廣瀬直人 『風の空』
歌 三井葉子 『句まじり詩集花』

第二回受賞者 短歌 河野裕子 『葦舟』
俳句 金子兜太 『日常』
歌 山本楡美子 『森へ行く道』

第三回受賞者 短歌 小池 光 『山鳩集』
俳句 八田木枯 『鏡騒』
歌 水野るり子 『ユニコーンの夜に』

第四回受賞者 短歌 花山多佳子 『胡瓜草』
俳句 小檜山繫子 『坐臥逆転』
歌 岬 多可子 『静かに、毀れている庭』

第五回受賞者 短歌 高野公彦 『河骨川』
短歌 伊藤一彦 『待ち時間』
俳句 友岡子郷 『黙礼』

第六回受賞者 短歌 小島ゆかり 『純白光』
俳句 高野ムツオ 『萬の翅』

第七回受賞者 短歌 坂井修一 『亀のピカソ』
俳句 大峯あきら 『短夜』

第八回受賞者 短歌 米川千嘉子 『吹雪の水族館』
俳句 西村和子 『椅子ひとつ』

第九回受賞者 短歌 吉川宏志 『鳥の見しもの』
俳句 茨木和生 『熊檻』

第十回受賞者 短歌 川野里子 『硝子の島』
俳句 榎 未知子 『カムイ』

第十一回受賞者 短歌 栗木京子 『ランプの精』
俳句 岡田一実 『記憶における沼とその他の在処』